

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：21501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370288

研究課題名(和文) 長い18世紀の女性リバタイン表象と共感に基づく親密圏の形成に関する学際的研究

研究課題名(英文) An Interdisciplinary Study on Representations of Female Libertine and its Sympathetic Formation of the Intimate Sphere in the Long Eighteenth Century

研究代表者

梶 理和子 (KAJI, RIWAKO)

山形県立保健医療大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：60299790

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、長い18世紀における女性の放蕩にかかわる言説の生産、流通、受容の過程を明らかにすることで、女性リバタインが共感に基づく親密圏を形成する可能性とその問題を明らかにした。そして、そのような親密圏の形成・変遷が、公共圏や私的空間の変容におよぼす影響についても、性的言説に限定せず、文学作品、定期刊行物、政治パンフレット等の言説を対象として、あわせて検証した。

研究成果の概要(英文)： This study clarifies possibilities of female libertine's sympathetic formation of the intimate sphere and its problematic elements by illuminating how discourses concerning female libertinism were created, circulated, and received in long Eighteenth century England. Transformations of public and private spheres following the creation of such an intimate female sphere have also been considered and analyzed on the basis of women's sexual / asexual representations in literary works, popular periodicals, and political pamphlets.

研究分野：人文学

キーワード：長い18世紀 女性リバタイン 共感 親密圏 公共圏

## 1. 研究開始当初の背景

近年、18世紀の公共圏における女性の役割に関する研究が進み、研究代表者も同様の関心から、それまで等閑視されてきた18世紀初頭の女性作家たちの状況および関係性、女性読者をめぐる定期行物による「知」の構築、公共圏の形成過程について考察してきた。また、女性作家の過激な言説と公共圏との関係にかかわる研究を受けて、公的空間と私的空間そして親密圏との問題を検証し、アフラ・ベーンやデラルヴィエール・マンリー、スザンナ・セントリーヴァといった17世紀後半から18世紀初頭の女性(劇)作家に注目することで、その言説と政治性との関係について研究を進めていたところであった。

そこで、主に女性作家と公共圏、親密圏、私的空間の関係性に注目し、研究を進めてきたなかで、異端とされる存在をも内包する親密圏を中心課題にすえること、そして、その形成・変容過程から公私空間への影響を探ることが、それまでの研究成果を深化させるのに重要な視座であるという認識に至った。男性リバティン(放蕩者)については、王政復古期のヒーロー研究や、改心劇というジャンルに注目した研究がある一方で、女性リバティンに焦点を当てた研究はあまり存在しなかった。しかし、2011年以降、17・18世紀における女性リバティンにかかわる言説、リバティニズムに影響を与えていた原子論、そして、センシビリティの誕生との関係にかかわる分析が登場し、その重要性に関心が寄せられるようになった。

本研究は、基本的に、そのような研究を踏まえて、長い18世紀における女性リバティンに関する言説を検証する必要性と有益性から、着想したものである。異端(とされる実在の人々・作品中の登場人物)の共感に基づく親密圏の形成という観点から、公私空間の変化について分析を行い、それによって、言説に限定しない放蕩に関する言説を軸に、主体と共同体の変容の過程を学際的に扱うことが可能になると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、いわゆる「長い18世紀」における、女性リバティンの表象に注目し、異端とされる存在の間に、どのようにして共感に基づいた親密圏が生じるかを考察することを目的とした。17世紀後半の女性職業作家の登場以来、男性/女性作家による演劇テキスト、コンダクト・ブック、定期行物等により、女性の放蕩にかかわる言説が表面化する状況のなかには、<放蕩する女性の排除>にとどまらない、<共感に基づく親密圏の形成>の過程が示され、さらに、それによって公共圏と私的空間が変容する可能性があると考えた。

そこで、そのような観点から、長い18世

紀における女性の放蕩に関する言説(男性/女性作家の韻文・散文テキストから、実在した人物やその人物にまつわる言説にいたるまで)を検証することとした。具体的には、研究代表者がそれまで研究してきた女性(劇)作家はじめ、作家自身がリバティンとされるジョージ・エサリッジらによる、男性および女性リバティン表象の分析をおこなうことである。また、クリーヴランド公爵夫人やネル・グウィンといった実在の女性たちと、彼女たちを扱う演劇や詩、パンフレット等をも射程に入れ、女性リバティンをめぐる言説の生産/流通/需要の過程を明らかにすることによって、この時代の異端と呼ばれる女性表象にまつわる文化を読み直すことを目的とした。

## 3. 研究の方法

長い18世紀の女性リバティンに関する学際的なテキスト研究において、その親密圏の形成に注目し、親密圏からの公私空間の変化の過程を、文学的・歴史的・文化的(コン)テキストから考察した。そのために、理論的基盤を整理(ジェンダー批評、公共圏の形成に関する理論、出版文化論を検討)しつつ、具体的なテキスト(文学、歴史、同時代の哲学や文化に関する一次、二次資料)を収集・整理し、それらを分析するという3方向から研究をおこなった。具体的な方法は以下のとおりである。

### (1) 女性リバティンに関する理論的基盤の検討

それまでも研究してきたジェンダー批評、公共圏に関する議論、出版文化に関する理論的基盤について、本研究(開始)の時点での最新の成果をまとめつつ、理論的可能性を検討した。具体的には、次の3点の理論的立場の関係性を、それぞれの批評、理論的研究に関して、研究協力者から専門知識の提供を受けながら、考察した。

#### ジェンダー批評の検討

女性の放蕩に関する言説について、女性の抑圧を読み込む従来の批評のみならず、その生産性・創造性に関する理論基盤を検討した。女性の連帯の可能性について考察する際には、共感という観点を軸として重視した。

#### 公共圏に関する理論の検討

従来のハーバースによる公共圏の形成に関する議論を親密圏という観点から再検討した。とりわけ、長い18世紀におけるデイヴィッド・ヒューム、アダム・スミスによる共感(同感)という概念の重要性に注目して、歴史的かつ理論的な考察をおこなうことによって、公共圏に関する理

論を再検討した。

#### 出版文化に関する理論の検討

当時の出版、ブックセラーと作家( 集団 ) がどのように力をもったかを歴史的に検討した。また、 との関連で、( 文芸 ) 公共圏の形成に果たした役割についても考察し、とりわけ、出版物の情報としての価値について検証をおこなった。

#### ( 2 ) 女性リバティンに関する国内外の一次資料の収集

まず、既に所有している資料の再検討をおこなったうえで、不足している資料等について確認、整理し、以下の 3 点について国内外で資料の収集にあたった。

#### 文学テキストの収集と分類・整理

それまでの研究で一定程度揃ってはいたが、マイナーな作家のテキスト等の拡充に、British Library 等で調査、収集にあたった。出版物の複写やマイクロフィルム等から収集したテキストについては、研究支援者を雇用して、可能な範囲で、スキャナーによる取り込み、OCR による文字認識をおこない、データベース化をはかった。

#### 流行・文化に関するテキストの収集と分類・整理

に加え、当時のさまざまな流行( 賭け事、ファッション、コレクション ) に関するテキスト( 一次資料、二次資料 ) も と同様の方法で同時に収集した。その後、特に女性の放蕩に関する言説との関係性の観点から、分類・整理し、 の文学テキストとの関連を検証しやすいかたちとなるよう心掛けた。

#### 実在した女性に関するテキストの収集と分類・整理

長い 18 世紀に実在したさまざまな女性リバティンに関する言説、また、その人物像にまつわる文学テキスト以外の言説を収集した。とりわけ、日記類、政治パンフレットや諷刺等における表象といった資料を、 と同様の方法で収集し、分類・整理をおこなった。

#### ( 3 ) 女性の放蕩に関するテキスト分析

( 1 ) ( 2 ) の作業を踏まえて、以下の 3 点から具体的なテキスト分析をおこなった。また、分析等に対して、他の研究者の意見をj 得ることで、その妥当性を確認した。

#### 男性作家による女性リバティンに関する言説分析

長い 18 世紀の男性( 劇 ) 作家によるリバティン言説を( 1 ) ( 2 ) に基づき再検

討を加えつつ、女性リバティンに関する言説の持つ意味に注目した。そこで、女性リバティンの批判・排除の言説だけでなく、それを利用・支援する言説を、テキスト分析によって析出した。

#### 女性作家による女性リバティンに関する言説分析

長い 18 世紀の女性( 劇 ) 作家によるリバティン言説を( 1 ) ( 2 ) に基づき再検討を加えつつ、女性リバティンに関する言説の持つ意味に注目した。そこで、女性リバティン表象がどのように作家としての自己形成の問題と結びつき、さらに、そこから女性の連帯の( 不 ) 可能性とどう結びついていたのかを、テキスト分析によって析出した。

#### 実在する女性の放蕩に関する言説分析

長い 18 世紀における、作家ではない女性( チャールズ二世の愛人たちや、名誉革命以降の貴族の女性等 ) にまつわる言説を、批判、排除という観点からではなく、親密圏の形成の契機としてテキスト分析をおこなった。

#### ( 4 ) 女性リバティンと親密圏の形成に関する検証

研究方法( 1 ) での理論的研究の( 再 ) 検討による成果に基づいて、( 2 ) で収集・整理した女性リバティンにかかわる資料を検証した。そこで、賭け事やコレクションといった行為の流行を中心に据えることが、作品上の / 実在の女性リバティンたちと、その親密圏形成( の可能性 ) を考察するうえで重要であることが明らかとなった。その重要性に留意しながら、( 3 ) の具体的なテキスト分析を組み立て、女性リバティンと親密圏の形成について考察をおこなった。その際に女性リバティン言説がどのように形成 / 流通 / 受容されたかという状況から、18 世紀後半の共感とモラルの問題に接続する方向性、そして階級横断的な親密圏を検討する方向性を探った。

#### ( 5 ) 親密圏の形成と公私空間への影響の検証

女性リバティンと親密圏の形成を検証することと平行して、そのような親密圏の成立や変遷の状況と公共圏や私的空間との関係性を考察した。理論研究に基づくテキスト分析により、長い 18 世紀において、親密圏形成の( 不 ) 可能性が、公私空間の在り方にどのような影響を及ぼしたのか検証し、またそれらの空間そのものと、その相互の影響関係の見直しをはかった。その際に、作業段階において、または( 暫定的 ) 総括の段階において、関心領域の重なる研究協力者や専門知識

を有する研究者に、理論基盤の整理・修正や、テキスト分析に対する批判的検証を依頼した。そこで、長い 18 世紀の女性リバティンをめぐる言説や、その親密圏と公私空間の関係性について議論するなかで、新しい視点や課題を確認した。

#### 4. 研究成果

従来、女性の表象に関する研究は、主に、その関心を性的言説に限定して、さらに、それを否定的な側面からとらえてきた。すなわち、(公共圏をはじめとする)公的領域に進出しようとする女性を性的にふしだらな存在として批判し、私的領域へと閉じ込めようとする社会の機能を強調する解釈へと陥りがちであった。性的放縦(と当時の社会が見なす言動)を標的に、風俗改善を求める気運や、女性の振る舞いを規定するコンダクト・ブックの人気の高まることで、「たしなみある女性」の姿が構築され、幅広い階層にまで浸透していく、そのような社会の(見えにくい、隅々まで浸透する)権力の作用に焦点を当てる傾向にあった。

本研究では、長い 18 世紀のイングランドにおける、性的言説に限定しない、女性リバティンをめぐる多様な言説を考察の対象として、そのような言説が生産され、流通し、受容される過程に注目した。そして、その過程で、公共圏、親密圏といった諸空間が変容する状況、相互の影響関係等を、共感をキーワードに、文学的・歴史的・文化的(コン)テキストから考察した結果、以下のような研究成果や新しい課題が得られた。

まず、従来の王政復古期の(男性)リバティン表象にかかわる研究の(再)検討をおこない、当時のリバティニズムにかかわる概念の基盤を理解する一方で、原子論等、17 世紀の「科学」を起点とする研究の展開の可能性、そして必要性を確認した。また、王党派主流の時代から、議会派が主流となる時代の、あるいは 18 世紀に中流階級と呼ばれる人々の、政治的・経済的台頭が顕在化する状況のなかで、男性リバティン表象がどのように多様化、変容していったかを検証した結果、性的放縦と政治批判を特性とするリバティンが、公共圏のみならず、女性たちの私的空間や親密圏(の形成や変容)に、さまざまな(影響)関係をもっていたことが明らかになった。

次に、男性リバティンにかかわる表象研究を参照しつつ、長い 18 世紀の歴史的・政治的状况のなかで、女性の放縦をめぐる言説がどのように作り出されて、どのように多様化していったかをテキスト分析に基づき、整理した。具体的には、男性作家と女性作家それぞれによる(性的な表象に限定されない)女性の放縦をめぐる言説が、ひき起こした相互作用を、演劇作品および一次資料等の分析、比較検討をおこなうことで、そのような言説の生産性、可能性を明らかにした。また、そ

のとき、男性、女性が個人としてではなく、興味関心を共有した親密圏を形成することで、(新しい)さまざまな言説の生産がおこなわれていた課程や、その結果についても検討したが、この課題は、18 世紀的市民社会の形成や、新しい消費文化のもとでのモラルの問題等に接続し、今後も継続して研究することが必要であり、有効であることを確認した。

女性の放縦に関する言説の流通・受容についても、文学作品、定期刊行物、政治パンフレット等の出版物による流通、とりわけ、どのような基盤が形成されることによって、単に排除の言説ではなく、生産的な言説として流通可能になったかを明らかにした。そして、どのような層に受容され、また、どのような受容層を作り出していたのかを考察したが、そこで、そのような受容に伴い、再び、新たな(異なる)かたちに変貌した女性の放縦に関する言説が形成されていくことも明らかになった。

以上のように、本研究は、性的言説に限定されない放縦全般に注目したことで、その否定的側面だけでなく、多様な創造的な側面を明らかにすることができた。また、同時に、従来の公的空間と私的空間の二項対立的な図式ではなく、興味関心を共有した共感に基づく親密圏の形成に焦点を当てたことで、これらの空間の多様性を確認することができた。すなわち、親密圏の(形成の萌芽・(不)可能性といった)あり方が、公的・私的あるいはその他の形態の空間に及ぼす影響関係から、新しい空間の可能性がうかがえたのである。そこで、長い 18 世紀における女性の放縦に対して抑圧、排除のみを重視するという姿勢(初期フェミニズム批評)を見直し、より生産的な言説の存在を確認できたと考えている。政治、経済、出版から娯楽や趣味に至る多様な領域に実在した女性にかかわる歴史的研究を踏まえ、女性表象研究を学際的観点からおこなったが、今後は、本研究の成果を生かし、女性リバティン研究をさらに発展させるために、18 世紀の感受性研究に結びつけることで、新たな視点の導入を考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

梶 理和子, 「Game にはまる女性たち — (アン)フェアなマナーとモラル—」, 『日本ジョンソン協会年報』第 37 号, 査読無, 2013, pp. 5-10.

[学会発表](計 3 件)

梶 理和子, 「消費文化と英国演劇」, 十七世紀英文学会 第 4 回全国大会, 2015

年5月22日，立正大学（東京都・品川区大崎）。

梶 理和子，「自由と欲望の不適切な関係—長い18世紀の喜劇における所有と消費—」. 十七世紀英文学会東北支部，2015年2月21日，東北学院大学（宮城県・仙台市）。

Riwako Kaji, “Social and Sexual Politeness: Representations of the East in the Eighteenth Century Dramas,” 45<sup>th</sup> American Society for Eighteenth-Century Studies Annual Meeting, 2014年3月22日, Williamsburg, Virginia, USA.

〔図書〕(計1件)

石倉 和佳，大橋 完太郎，梶 理和子. ブックウェイ，『ガーデン研究会ジャーナル1, 2015』, 2015, 66 ページ (pp. 41-51).

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

梶 理和子 (KAJI RIWAKO)  
山形県立保健医療大学・保健医療学部・  
准教授  
研究者番号：60299790